



## 付 6 1 話 大学における研究会

今回は、大学における研究会についてお話しする。コンピュータオタクの私にとって研究会に出席することは真に苦痛である。誘われても、何かと理由を付けてお断りする。多少なりとも興味のある研究会には仕方なく出席する。研究会での成果は、知識が深まることと、知人が増えることかもしれない。そこから成果物が得られるのは、まれである。研究会とはそんなものだと思えば、目くじら立てるほどの事はない。

昔は、建築学会の委員会活動も似ていた。研究会というより、むしろ懇談会のようなものであった。若い頃なので委員会は一つ、そのころの感想なので、偏見かもしれない。委員会に出席して、3度目だったと思う。いつものように各自の研究に関する話題を提供し、また世間話をする。和やかな中にも、そこにはヒエラルキーを感じる。多分、年齢とか学閥があるのかもしれない。そこへ、坪井善勝先生が入ってきた。様子が一変、皆の顔が緊張感で引きつる。これまでの経緯を事細かく説明。典型的な村社会のボスである。無論、坪井先生を尊敬するが、若い自分にとって何となく違和感を覚える。学会の委員会とはこんなものか。恐怖を覚えて、しばらく委員会をさぼることにした。近年の委員会活動はテーマや期限を決め、成果を求める。以前の懇談会のような委員会は一変し、委員会らしくなる。若い委員も活発に発言し、ヒエラルキーも感じない。これこそ真の委員会であり、成果も期待できる。

話を元に戻すと、私が参加した最初の研究会は、理工学部の仲間が集まった数人のコンピュータ同好会である。若い研究者ばかりで、多分、私と同様コンピュータオタクである。構造解析屋が多く、航空や機械系に属する。当時、大学の計算センターでは、電気科のボス教授が全てを取り仕切っていた。それに対する反発だったかもしれない。週に一度集まり、大学のコンピュータ環境と教育について話し合い、現状への不満をぶつけ合っていたと記憶している。さらに、自分の研究内容と学科のコンピュータ状況を話し、将来の夢を語りあう。若手の同年齢、気楽に話し合えて面白い。学科内には同世代の研究者が少なく、気楽に話し合える場所がない。狭い世界を飛び超え、しかも同じ趣味の研究者の集まりである。楽しいひと時であった。どこから聞きつけたか分からないが、ボスの助手が研究会に参加したいとやってきた。多少なりとも気にかけていたのかもしれない。断る理由がないので、参加を許すと毎回やってきて、話すでもなく、皆が喋るのを聞き入っていた。それ以後何となく

気まずく、話はずまない。しばらくして、同好会は自然消滅した。何故、消滅したかは定かではないが、のどに刺さった棘のように口が重くなる。オタク族の集まりに異分子が入ると何かと気まずい。多分これが原因で、皆の足が遠のいたのだと思う。

名大の T g 教授の発案で始まった研究会、若い頃の話である。T g 先生は耐震工学が専門、当時、中部地方の耐震や防災に関する指導者でもある。T g 先生は、研究者が独自に開発したソフトを集めてライブラリ化し、公開したいと言う。相談を受け、近隣の若手研究者に呼び掛け、研究会を立ち上げた後、公表に向けて準備しようということになった。その頃の研究者は、コンピュータを用いた研究ではほとんど自前のソフトを使用する。若い研究者にとって市販のソフトは高額で、おいそれとは手が出ない。プログラム開発ができるのは当たり前、特に若手研究者は、「プログラミングが上手だ」と自負する。近隣の構造力学や耐震工学を専門とする若手研究者に声を掛け、研究会を立ち上げた。十数名の研究者が集まり、研究会の趣旨や各自の思うところを語り合った。なかなか意見がまとまらない。こんな簡単な目的なのに T g 先生の思いは伝わらない。まずは、各自の研究とプログラミング技法について発表することになった。何となくお定まりのコースをたどり、研究会は消滅の気配がする。数人が自分の研究について発表すると同時に、FORTRAN のソースコードを提出した。ソースコードを見て、これはまずいと直感した。単体としては動作するが、公表に値するサブルーチンが余りない。重要な部分は、他のライブラリの借用か、本からのコピーが多い。これでは自前のライブラリ化は難しい。T g 先生の意気込みは急激に消沈、掲げた目標は立派だが、中身が付いていかない。研究会の開催時期は1週間間隔から2週間へ、さらにひと月となり、最後は自然消滅となった。

最後に、30 年以上も前の民間企業とのお話しである。学内の先生に誘われて、大手企業 T 社の技術部門と子会社の研究会に参加する。目的は、子会社のプラスチック射出成形用金型の設計に関する技術開発だったと思う、が定かに覚えていない。T 社の関係で多くの最新技術に関する話が聞け、興味深い。例えば 3D プリンターや AI による故障部位の特定など。当時としては最新の技術であったと思う。ただ、研究会の目的は進化せず、結局自然消滅となった。強いリーダーシップはあったが、目標が高すぎたのか、成果へとは結び付かなかった。

上記のように、強い拘束力とリーダーシップがないと、研究会での成果は得られない。まあ、こんなものかと思えば、怒ることもない。これらの経験は、SPACE の開発で大いに役立つことになる